

Decreased cognitive function is associated with dysphagia risk in nursing home older residents

矢田部，尚子

<https://hdl.handle.net/2324/2236148>

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士（歯学）, 課程博士
バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



KYUSHU UNIVERSITY

(様式 3)

氏 名 : 矢田部 尚子

論 文 名 : Decreased cognitive function is associated with dysphagia risk
in nursing home older residents
(施設入所高齢者における認知機能低下と嚥下障害リスクの関連)

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

認知機能低下は摂食・嚥下における食物の認知や摂食に影響し、嚥下障害の増悪因子となる可能性がある。また、認知機能低下と嚥下障害リスクの関連において有歯顎か無歯顎かが重要な交絡因子の1つであると考えられる。本研究では、介護施設高齢者を対象として、認知機能低下と嚥下障害リスクの関連が有歯顎群と無歯顎群において異なるかについて検討を行った。

熊本県阿蘇市内の60歳以上の介護施設高齢者236名に対し、嚥下障害リスクのスクリーニングとして改訂水飲みテストを行い、スコアが1から3までの対象者を嚥下障害リスクありとした。認知機能の評価にはミニメンタルステート検査(Mini Mental State Examination; MMSE)を用いた。共変量として、人口統計的特性、基本的日常生活動作、併存疾患の既往、生活習慣、咬合支持を含めた。

対象者は、現在歯数によって、有歯顎群(n=111)と、無歯顎群(n=125)に分類された。ロジスティック回帰モデルを用いた分析を行ったところ、有歯顎群では共変量による調整後、MMSEスコアが高くなるほど有意に嚥下障害リスクが減少した(オッズ比: 0.87; 95%信頼区間: 0.80–0.96)。無歯顎群では有意ではないものの、MMSEスコアが高くなるほど嚥下障害リスクが減少する傾向がみられた(オッズ比: 0.92; 95%信頼区間: 0.83–1.00)。

以上より、認知機能の低下した施設入所高齢者ほど嚥下障害リスクを有する割合が高いという関連は有歯顎群及び無歯顎群で同様の傾向を示し、施設入所高齢者において認知機能低下により嚥下障害の発現を予測できる可能性が示唆された。